

# 地いびき



324号

## 一枚の絵 ―窮極の悲しみ

丸岡 稔

私の生まれた村は、天平時代に建てられたという名刹乙宝寺のあ  
る乙<sup>のち</sup>というところで、小さい時から真言宗独特の「オンナモキヤベ  
ロシヤノマカボダラ……」とか「ナムカラタンノトラヤーヤー……」  
というようなお経を聞いて育ったと言ってもいいのです。意味が分  
らなくても、その音楽的なリズムが子供心にも心地よく感じられた  
ものでしたが、佛教に興味を持つようになったのは50才を過ぎてか  
らでした。自分の人生の問題でもありますが、残されたいのちが限  
られた患者さんに、どう寄り添って行ったらいいか考えた時、特別  
な信仰を持たない、というより持てないまま、佛教の本や聖書を読  
み始めました。佛教でよく分らないことが聖書の中のエピソードで  
理解出来たこと、逆に聖書で理解出来ないことが佛教の事例で解決  
したことが度々あり興味をそそられました。そんな時、もう10数年  
前になりますが、聖書の中である疑問が起り、それが次第に膨らん  
で来ました。レオナルド・ダヴィンチの絵で有名な「最後の晩餐」で  
キリストが、12人の弟子を前に「この中で自分を売るものがある」  
と言います。ユダのことです。彼は、キリストを捕えようとしてい  
る者に銀貨30枚でキリストを教えます。弟子12人を含む集団の会計  
係をしていたユダにとって、「これだけの金があれば」と思ったに

違いありません。その結果、キリストは捕えられ磔刑に処されます。そこまでは考え及ばなかったユダは、銀貨30枚を返そうとするが聞き入れられず、絶望して直ちに首を吊って死ぬ。と聖書のマタイ伝に書いてあります。他の11人の弟子は、ばらばらに逃げ去りますが、後にキリストの教えを伝達する為に生涯を捧げるようになります。仏教では、「嘆異抄」に「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」と説いています。もしユダが生きていたら、他の誰よりも伝導者として行動したに違いないと思ったのです。「何故、キリスト教ではユダを悪人として決めつけるのか。彼こそ救われるべきではないのか」

この疑問を私はキリスト教信者に会う度に訊ねますが、信仰を保持しているかどうかの違いでしょうか、納得の行く返事を貰ったことはありません。私の知人であるキリスト教系の大学の学長さんに訊ねたことがあります、「うーん」と唸って「僕の宿題にして下さい」と言われ、何年か後に話を聞いたのですが、さっぱり分かりませんでした。

今から12年前ある画集で私は一枚の絵に出会いました。

17世紀のオランダの巨匠、レンブラントの「銀貨を返すユダ」という絵でした。人間の悲しみの深さを、これ程までに描いた作品を私は知りません。「肺腑を抉られる」という言葉がありますが、正にそういう言葉でしか言い表わせない衝撃を受けました。

レンブラントと言えば、数々の名作で知られていますが、彼の人生は極めて苦難に満ちたものでした。別けても晩年になって次々と

子供を含めた近親を失い、一人ぼっちになりながら、人間の奥深い感情を描写しようとした。

キリストの生涯や聖書の中のエピソードをドラマチックに描いた作品は著名な人のものも含めて夥しい数があり、キリストの死を悲しむ場面も数多く現われますが、説明以上に心を揺さぶられるという体験をしたことはありません。

レンブラントの体験した悲しみはどのようなものであったか想像するだけですが、ユダの悲しみに共感するものがあつたに違いありません。ユダに対する愛情なくしてこの悲しみを表現することは出来なかったのではないかと、そう思ったのでした。



「銀貨30枚を返すユダ」の作品は、1629年作の油彩画で、大きさは79×102cmだそうです。個人の所有で、今まで一般に公開されたことは無いようで、今後も望めないかもしれません。

この絵を目にしてから、しばらくこの画像が頭から離れませんでした。ふと気がついたことは、いつの間にかユダが、何故いつまでも悪人なのかと疑問へのこだわりが無くなっていることでした。

私が知りたかったことは、全てこの絵の中にユダの表情の中に在ると思えたからでした。「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや…」という言葉もユダから遠ざかってしまいました。

今から10年程前に、世紀の大発見などと言われて、「ユダの福音書が見つかった」と報ぜられ一時大きな話題になりました。本も出版されました。私は読んでいませんが、「ユダは裏切り者ではなかった」とするものでした。私は「あ、やっぱり」と思っただけで、これまで、この手の本が出なかったのが不思議でした。しばらくは話題が拡がって行くだろうとある種の期待と興味を持ったのですが、いつの間にか消えてしまいました。

3月になれば91才になる私ですが、とっくにしっかりした死生観を持っていていい筈なのに、未だに迷いの中にさまよっています。

あの世とか来世とか信ずることが出来れば確信を持って患者さんに接することが出来るのですが、悲しければ悲しい者同志、淋しければ淋しい同志、怖ければ怖いなりに共感を持って寄り添って行くしかないと思っています。